

6 3 6 1 - 9 4 7
平成 2 1 年 2 月 2 5 日

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成 2 0 年度病害虫発生予報第 1 1 号について

平成 2 0 年度病害虫発生予報第 1 1 号を発表したので送付します。

平成 2 0 年度病害虫発生予報第 1 1 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	いもち病（苗いもち） スクミリンゴガイ	-	2
		やや少	2
施設野菜全般	病害一般 タバココナジラミ類	-	2
		-	2
冬春キュウリ	うどんこ病	並	3
	べと病	並	3
	灰色かび病	やや少	3
	褐斑病	やや多	3
	ミナミキイロアザミウマ	やや多	4
	退緑黄化病（仮称）	-	4
冬春ピーマン	うどんこ病	やや少	4
	斑点病	やや多	4
	ミナミキイロアザミウマ	やや多	4
	黒枯病	-	5
冬春トマト	葉かび病	並	5
	灰色かび病	やや多	5
	タバココナジラミ類	やや多	5
	トマト黄化葉巻病（TYLCV）	-	6
冬春イチゴ	うどんこ病	並	6
	灰色かび病	やや多	6
	ハダニ類	やや多	6
	アブラムシ類	並	6
カンキツ	ミカンハダニ	やや多	7
茶	カンザワハダニ	多	7

は防除情報、 は注意報を発表

作物の生育状況（2月中旬）

冬春キュウリの促成栽培、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春イチゴは収穫期であった。

3月の気象予報

天気は平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は高い確率70%、降水量は多い確率50%、日照時間は少ない確率50%と予想されている。

（1か月予報 鹿児島地方気象台 2月20日発表）

発生予報の根拠および防除対策

早期水稲

1. いもち病（苗いもち）（-）

[防除上の注意]

- (1) 長期予報では、天気は平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は高く、降水量は多いと予想されており、本病の発生・蔓延に好適な条件が続くと考えられるので注意が必要である。
- (2) 育苗時に発生がなくても本田で早期に発生する恐れがあるので、移植時の箱施薬を徹底する。

2. スクミリンゴガイ（やや少）

[予報の根拠]

- (1) 水稲収穫後の未耕起水田（佐土原町）での2月中旬の㎡当り総貝数4.0頭（平年6.8頭）、生貝率23.4%（平年53.5%）はいずれも平年よりやや少である。
- (2) 用水路での㎡当り総貝数22.8頭（平年36.4頭）、生貝率33.6%（平年65.2%）はいずれも平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 水田に生息する貝は、耕耘により破碎し防除する。この場合、土壌が硬いほど、耕耘ピッチが小さいほど、貝が大きいほど殺貝効果が高い。耕耘する深さは殺貝効果にあまり違いがないので、貝が主に越冬生息している土壌表層部を細かく耕耘するのが有効である。
- (2) 用排水路からの侵入を防ぐため水の出入り口にネットを設置する。
- (3) 田植後2～3週間はできるだけ水深1cm以下の浅水管理とする。
- (4) 貝の生息量が多い場合には、薬剤の育苗箱施用と本田施用を実施する。

施設野菜全般

1 病害一般

平成20年度病害虫防除情報第7号（2月24日発表）参照

長期予報によると、平年に比べて曇りや雨の日が多く、降水量は多い。日照時間は少なく気温は高いと予想されていることから、各種病害の発生に好適な条件となるため、気候の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底する。

また、今後は夜温も高めに推移することから加温機が稼働しない日は、施設内が多湿になり病害の発生が助長される傾向があるので特に注意が必要である。

キュウリ：べと病、灰色かび病、菌核病、斑点細菌病、褐斑病など

トマト：疫病、灰色かび病、菌核病、葉かび病、すすかび病など

ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病、軟腐病など

2 タバココナジラミ類（タバコナジラミ、イトナジラミ、Q、シムバ-リ-コナジラミ）（-）

[予報の根拠]

- (1) 冬春キュウリでの発生面積率35.0%（平年29.5%）は平年並、100葉当たり虫数20.0頭（平年5.5頭）は平年より多である。
- (2) 冬春ピーマンでの発生面積率7.1%（前年13.3%、前々年7.7%）は前々年と同程度、100葉当たり虫数0.1頭（前年0.3頭、前々年0.5頭）は過去2か年より少ない状況である。
- (3) 冬春トマトでの発生面積率69.2%（平年27.1%）は平年より多、100葉当たり虫数5.3頭（平年2.2頭）は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) タバココナジラミ バイオタイプQとシルバーリーフコナジラミの形態上の差異は成虫、幼虫ともに確認されておらず、両種の肉眼での区別は困難である。
- (2) 多発するとスス病を併発して商品価値を著しく損ねるので初期防除を徹底する。
- (3) 低密度でも、トマトではトマト黄化葉巻病(T Y L C V)を媒介したり、ウリ科作物(メロンやキュウリ)では退緑黄化病(C C Y V)(仮称)を媒介することが明らかになっているので、特に注意が必要である。
- (4) 防除対策については、トマトのタバココナジラミ類(5 ページの 3)を参照のこと。

冬春キュウリ

1 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 促成栽培での2月中旬の発生面積率45.0% (平年47.1%) は平年並、発病葉率3.3% (平年7.7%) は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので発病を確認したら早めに防除する。
- (2) 耐性菌を生じやすいので系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (3) 乾燥時に発生が多くなるのでほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。
- (4) 半促成栽培でも急速に病勢が進展することがあるので促成栽培と同様の注意が必要である。

2 べと病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率80.0% (平年80.2%) は平年並、発病葉率9.6% (平年20.7%) は平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすく、発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- (2) 窒素切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

3 灰色かび病 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率5.0% (平年15.3%) は平年よりやや少、発病果率0.1% (平年0.7%) は平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) ハウス内が多湿にならないように換気や灌水に注意する。
- (2) 予防及び発病初期の防除を徹底する。
- (3) 耐性菌が発生しやすいので系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4 褐斑病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率60.0% (平年51.1%) は平年よりやや多、発病葉率8.3% (平年10.3%) は平年よりやや少である。
- (2) 長期予報では、気温は高い、降水量は多い、日照時間は少ないと予想されており、本病の発生・蔓延に好適な条件が続くと考えられる。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。
- (2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。
- (3) うどんこ病、べと病の発生後には激発することがあるので、両病害の防除を徹底する。

5 ミナミキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率15.0% (平年10.5%) は平年並、葉当り虫数1.1頭 (平年0.4頭) は平年よりやや多である。
- (2) 長期予報では、気温は平年より高いと予想されており、本虫の増殖に好適な条件がつづくと考えられる。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。
- (2) 施設内では、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので7日間隔で2~3回の連続した防除を行う。

6 退緑黄化病 (仮称)

[防除上の注意]

- (1) 本病はタバココナジラミ類が媒介する新規ウイルスによって引き起こされる病害で、下位葉を中心に斑状の黄化を生じ、葉縁が下向きに巻く症状を呈する。
- (2) メロンでは、交配期前の感染被害がもっとも大きい。
- (3) すでに県内各地で発生が確認されており、2月中旬の巡回調査における発生面積率は30.0%であった。
- (4) 今後、気温の上昇に伴い、媒介虫の増殖や、施設の開閉に伴う保毒虫の拡散が懸念されるので防除を徹底する。

冬春ピーマン

1 うどんこ病 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率28.6% (平年50.9%)、発病葉率2.0% (平年6.0%) はいずれも平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- (2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。

2 斑点病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率50.0% (平年33.4%)、発病葉率4.5% (平年3.0%) はいずれも平年並である。
- (2) 長期予報では、気温は高い、降水量は多い、日照時間は少ないと予想されており、本病の発生・蔓延に好適な条件が続くと考えられる。

[防除上の注意]

- (1) ハウス内が高湿多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。
- (2) 病原菌が植物体に侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

3 ミナミキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率28.5% (平年29.7%)、10花当り寄生虫数1.0頭 (平年0.9

頭)はいずれも平年並である。

- (2) 長期予報では、気温は高いと予想されており、本虫の増殖に好適な条件が続くと考えられる。

[防除上の注意]

- (1) 今後、気温の上昇とともに例年増加していく時期であるので注意が必要である。
- (2) 10花当り寄生虫数が1頭から被害果が出始め、また、発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除を徹底する。

4 黒枯病 (-)

[防除上の注意]

- (1) 長期予報では、気温は高い、降水量は多い、日照時間は少ないと予想されており、また、今後気温の上昇に伴い、例年発生が増加していくので注意が必要である。
- (2) ほ場内が多湿条件にならないよう、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。
- (3) 被害茎葉、果実は伝染源となるのでほ場外に持ち出し、適切に処理する。

冬春トマト

1 葉かび病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率15.4%(平年15.8%)、発病株率1.9%(平年2.4%)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) ミニトマトでの発生が多く、また、すすかび病の発生も一部に見られるので注意する。
- (2) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- (3) 発病初期の防除を徹底する。

2 灰色かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の茎葉での発生面積率61.5%(平年17.9%)、発病株率6.4%(平年0.8%)はいずれも平年より多である。
- (2) 果実での発生面積率7.7%(平年10.4%)は平年よりやや少、発病果率0.3%(平年0.6%)は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 低温多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下をはかり、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- (2) 花卉の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3 タバココナジラミ類 (外、コナジラミ、イタワ、Q、シバ-リ-コナジラミ) (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の巡回調査では発生面積率69.2%(平年27.1%)は平年より多、100葉当たり虫数5.3頭(平年2.2頭)は平年よりやや多である。
- (2) 長期予報では、気温は高いと予想されており、本虫の増殖に好適な条件が続くと考えられる。

[防除上の注意]

- (1) 黄色粘着トラップ等を設置し、タバココナジラミ類の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- (2) タバココナジラミバイオタイプQに効果のある殺虫剤が少ないことから、発見したら早めに防除し、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- (3) 施設内外の雑草はコナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。

- (4) 有効な薬剤に対する抵抗性の発現を回避する観点から、同一及び同一系統の薬剤の連用は極力避け、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発現の可能性が低いボタニガードES等の微生物農薬や、粘着くん液剤等のコナジラミを物理的に窒息死させる薬剤を防除体系に組み込む。

4 トマト黄化葉巻病 (TYLCV) (-)

[防除上の注意]

- (1) 発病株は伝染源になるので、根ごと抜き去り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

冬春イチゴ

1 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の葉での発生面積率38.5% (平年27.4%) は平年よりやや多、発病葉率1.1% (平年2.4%) は平年並である。
(2) 果実では発生未確認である。(平年値 発生面積率11.3%、発病果率0.5%)

[防除上の注意]

- (1) 葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。
(2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くする。
(3) 発病果など被害部は伝染源になるので、早めに除去しほ場内に放置しない。

2 灰色かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率15.4% (平年8.7%) は平年並、発病果率0.5% (平年0.3%) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、換気に努めると同時に、薬剤散布、灌水にあたっては施設内の空気湿度を高めないように留意する。
(2) 病果や病葉は早めに摘除してほ場内に放置しない。
(3) 薬剤耐性菌が出現しやすいので系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3 ハダニ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率76.9% (平年47.9%)、寄生株率16.0% (平年12.0%) はいずれも平年よりやや多である。
(2) 長期予報では、気温は平年より高いと予想されており、本虫の増殖に好適な条件が続くと考えられる。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
(2) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
(3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率15.4% (平年22.7%)、寄生株率0.9% (平年2.1%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。

- (2) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

カンキツ

1 ミカンハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率55.0% (平年44.1%) は平年よりやや多、寄生葉率7.8% (平年10.5%) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 越冬密度の高いほ場や冬季マシン油乳剤を散布できなかったほ場では、春季 (3月上～中旬) にマシン油乳剤による防除を行う。

茶

1 カンザワハダニ (多)

平成20年度病害虫発生予察注意報第5号 (平成21年2月25日発表) 参照

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率は、摘採面では69.2% (平年36.8%)、すそ部では92.3% (平年54.7%) でいずれも平年より多である。
- (2) 摘採面での寄生葉率5.7% (平年2.1%)、すそ部での寄生葉率22.0% (平年6.2%) はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は、増殖が始まる前の密度の低い時期 (2月下～3月中旬) で、すそ部の葉裏に多く生息しているので、十分な薬液が到達するように丁寧に散布する。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>
農林水産消費安全技術センターホームページ
(旧 農薬検査所) <http://www.acis.famic.go.jp/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤(商品名、マリックス乳剤、粒剤等)は使用しないこと。
- 3 発生量(程度)の区分
多 い (高 い) やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い (やや高い) 平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並 平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない (やや低い) 平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない (低 い) やや少ないの外側10%の度数の入る幅
(平年値は過去10年間の平均)
- 4 予察情報の種類
病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。
(1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
(2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
(3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
(4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
(5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ(<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を掲載しています。ぜひご利用ください。

【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 生頼

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499

E-mail: byogaichu-hiryo

@pref.miyazaki.lg.jp